

イタチの冬期の食性とその保護

誌名	日本応用動物昆虫学会誌
ISSN	00214914
著者名	大津,正英
発行元	
巻/号	15巻2号
掲載ページ	p. 87-88
発行年月	1971年6月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



短 報

イタチの冬期の食性とその保護¹

大 津 正 英

山形県林業指導所

(1970年6月17日受領)

イタチ *Mustela itatsi itatsi* TEMMINCK は、野ネズミを好んで捕食し、農林業上きわめて重要な益獣であることは、古くから指摘されている。

岸田 (1927) および 平岩・内田 (1960) は、イタチの重要性をその食性を中心にして論じたが、犬飼は食性ととも明治以前に北海道には生息しなかったイタチの北海道への侵入径路 (犬飼, 1934) や、その保護策 (犬飼, 1935)、および野ネズミによる被害防除のためのイタチの放飼について (犬飼, 1949) 詳細にわたり報告しており、また北海道のその後のイタチの分布状況や問題点などについては上田 (1968 a, b, 1969) によって報告されている。

筆者は、山形県下の朝日岳および飯豊山の山麓におけるイタチの食性を調査し、最近の拡大造林に伴い著しく目立つようになった野ネズミの被害防除に対し、イタチがきわめて重要な働きをしていることを再確認するとともに、東北地方においてこれに類する調査研究がみられないので報告する。

本文にはいるに先だち、種々ご教示を仰ぎ、本報をご校閲して下さった北海道大学名誉教授犬飼哲夫博士に深甚なる謝意を表する。

また調査材料の収集に協力された山形県西村山郡大江町沢口黒川太左衛門、山形県西置賜郡小国町小渡 木村勇太郎、同町松崎仁科熊吉の3氏に対しても厚くお礼を申しあげる。

材 料 と 方 法

材料は1968年12月1日から翌年2月15日、および1969年12月1日から翌年2月15日までの2猟期にわたり、山形県下の朝日岳 (主峰: 大朝日岳, 1,870.3m) と飯豊山 (主峰: 飯豊山, 2,105.1m) の山麓の標高200~700mの地帯で捕獲された雄イタチである。捕獲動物は皮剥ぎ後できるだけすみやかにホルマリン10倍液に浸漬して実験室に持帰り、実体顕微鏡によってその胃の内容物を調査した。調査した総個体数は75頭である。

なお捕獲地は、山形県内では比較的未開発の地域であり、積雪深は2~4mに達し、根雪期間は、ほぼ12月上旬から翌年の4月上旬までである。以前は交通が不便なため人工造林地が少なかったが、最近林道網が著しく発達し拡大造林が進み、これとともに野ネズミによる被害面積が増加している。農耕地は狭小な田畑が散在し、それらには農業が多量に使用され、イタチが捕食する生物は激減している。また以前はイタチによる魚類やニワトリの被害がみられたが、現在はほとんどみられない。しかし山形県ではイタチの生息密度が最も高い地域とみられ、捕獲数も他の地域より著しく多いが、最近その捕獲数は激減しており、専業として捕獲している者はいない。

結 果 と 考 察

さきに報告された岸田 (1927) と犬飼 (1935) の調査結果と、今回の調査結果を比較表示すれば、第1表のとおりである。

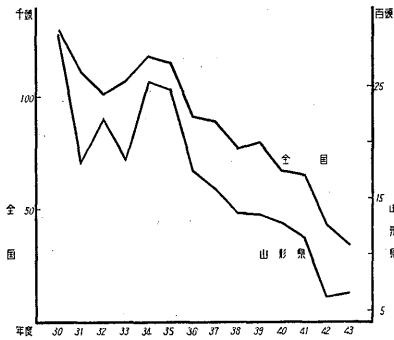
すなわち岸田の本州における冬期の調査で、ネズミ類を捕食していたイタチの個体数は、調査した総個体数の40.1%である。また犬飼の北海道における冬期の2回の調査によると、ネズミ類を捕食していたイタチの個体数は、調査した総個体数に対し、第1回目は、50.4%、第2回目は50.7%であり、いずれもネズミ類は、他の生物に比較し著しく多くイタチによって捕食されている。今回の山形県における冬期の調査では、ネズミ類を捕食していたイタチの個体数は、調査した総個体数の49.3%で、犬飼が北海道で調査した結果よりわずかに少ない割合で

第1表 各種動物と菌類を摂食したイタチの個体数

食物の種類 調査者	空胃	ネズミ	カエル	昆虫	魚類	ミミズ	クモ	小鳥	カナヘビ	ジムカデ	ダニ	ザリガニ	サワガニ	ジネズミ	ノウサギ	ヤマドリ	キクラゲ	計
岸田	12	43	24	15	8	6	5	3	1	0	1	0	0	0	0	0	0	106
犬飼(1)	16	52	1	9	4	11	0	7	0	2	0	3	0	3	4	0	0	103
犬飼(2)	18	70	4	12	4	14	0	10	0	0	0	3	0	3	0	0	0	138
大津	13	37	4	0	5	0	0	9	0	0	0	0	4	0	1	1	1	75

(1): (犬飼, 1934) (2): (犬飼, 1935)

1 On the food habit of Japanese mink, *Mustela itatsi itatsi* TEMMINCK, in winter and its protection. By Shōei ŌTSU (Forest Research Institute of Yamagata Prefecture, Sagae, 991)
日本応用動物昆虫学会誌 (応動昆) 第15巻 第2号: 87~88 (1971)



第1図 近年におけるわが国のイタチの捕獲数。

あるが、捕食されていたネズミ類の大部分は、農林業に有害なハタネズミとヤチネズミであった。また調査した総個体のうち17.3%が空胃であったが、これらの個体も当然ネズミ類を捕食する可能性はあるわけで、ネズミ類を捕食する割合は、さらに高いものと考えられる。なお1個体が同時に2種類以上の食物を摂食していた個体はみられなかった。以上のようにイタチは著しくネズミ類を捕食するが、湯川(1968)は広島県比和地方で、ネズミ類を捕食していたイタチは84個体のうち、わずかに8個体であり、この少ない原因は、同地方にはハタネズミが少ないためらしいと報告している。

今回の調査で、岸田および犬飼の報告にみられなかったものとして、サワガニを捕食しているのが4個体みられたが、これは当地方の小沢に比較的多くサワガニが分布するためとみられる。またヤマドリ(の)羽毛とノウサギの毛皮およびそれらの肉塊がみられたが、これは銃猟により負傷した個体を捕食したものと考えられた。なお当地方ではキクラゲの発生量が多いが、これを多量に摂食していた個体はみられたが、珍しい例と考える。

農林業において野ネズミ類をイタチに捕食させて被害防除を行なう場合、当然両者の生息密度が問題となるが、イタチの保

護に積極的な北海道においてすら、野ネズミ類の被害防除に十分な生息密度に達していない地域の多いことが指摘されている(上田, 1969)。

山形県においては、年々10,000 ha以上の針葉樹の人工造林が行なわれ、また果樹類の植栽も盛んであり、野ネズミによる被害とその危険面積は急激に増加している。しかし昭和30年度以降のイタチの捕獲数は、林野庁による狩猟関係統計(昭和30~40年度)によると第1図のとおりで、多少の変動はあるにしても年々減少している。すなわち昭和30年度に比較し、昭和43年度には全国で26.0%(昭和30年, 129,638頭:昭和43年, 33,650頭)山形県では22.3%(昭和30年, 2,963頭:昭和43年, 660頭)の捕獲数である。この捕獲数の減少は農業で汚染された生物や、殺鼠剤で中毒を起した野ネズミをイタチが捕食して死亡し、生息密度が低下したためと考える。筆者は1966年6月山形県東村山郡山辺町畑谷で死亡した雄イタチを拾得し調査したところ、中毒死したとみられる野ネズミを摂食していた。したがって今後ともこのような農業や殺鼠剤を使用し、また捕獲を継続した場合、この有益な動物であるイタチは著しく減少し、野ネズミを駆除できないだけでなく、滅亡の危機すらあるものと考えられる。このためイタチの捕獲は全面的に禁止すべきであり、さらに二次被害を起さない農業や殺鼠剤の開発は、急を要するものがある。

引用文献

- 平岩馨邦・内田照章(1960) 森林防疫ニュース 9:11~13.
 犬飼哲夫(1934) 植物及動物 2:1309~1317.
 犬飼哲夫(1935) 応動 7:49~52.
 犬飼哲夫(1949) 札幌博物学報 18:56~59.
 岸田久吉(1927) 鳥獣調査報告 4:121~160.
 上田明一(1968 a) 野ねずみ No. 85:1~3.
 上田明一(1968 b) 野ねずみ No. 86:6~9.
 上田明一(1969) 野ねずみ No. 89:6~8.
 湯川 仁(1968) 比和科博研報 No. 12:7~10.